場)、前後の世代とのパイプ役となった。

第1回中国交流会　1997　9～12期生

インターハイ予選男女優勝　9期生 1997　天台にて

＊4.　12期生～14期生

引き続き、女子は西武台中からの選手が増え、その大半は野田市内のジュニアチームからの選手でキャリアも長く、上位大会の経験者も増え、県から関東へそして全国へと活躍の場を拡げた。

practice 主な練習

練習はノック系からパターン・つなぎ系に変わり、より実践に近い形態がとられた。これは、選手がジュニア、中学経験者ばかりになったのと、第二体育館が完成した事も大きな要因である。その反面、特に男子において安易な入部と繰り返し練習の不足による体力面、精神面の弱さが露呈した。バドミントン（ストローク編）テクニカル・ダイジェスト―連続写真で学ぶ技術―：ベースボールマガジンを読む。月曜夜　春日部武里中（７面）金曜夜　松戸六実中（８面）

tournament 主な大会

女子の岡田真由美は中学生時代から数々の県チャンピオンを独占し、西武台としての記録を達成した。その中でも、中学、高校から始め大会で記録を残す選手もいた。12 期の瀬能選手は、身長 153 ㎝と体格には恵まれていなかったため、特に中学時代はさほど勝ち残れなかったが、高校進学後繰り返しの練習が実り、中学時代ランキング保持者を続々と倒し、岩手インハイ個人戦シングルスにおいてノーシードから見事にベスト８、高松宮妃賜杯に入賞した。また、14 期の岡戸は、国体関ブロ通過時の選手として活躍し、瀬能ユと五十嵐、高橋、13 期佐喜川も高校デビュー選手としてその名を残した。

コラム2　１９９７関東大会千葉県予選（Ｔ＆Ｂ 1997.５号より）

新人戦で男子が不覚にもベスト８に転落し、関東大会の連続出場が危ぶまれる声の中、平成９年度関東高等学校バドミントン選手権千葉県予選会が５月３．４日の連休を使って県総合体育館他で行われた。参加校１５０校はそれぞれの地区予選を経て男女各６４校にしぼられ熱戦の幕が切り落とされた。

当初組み合わせによっては優勝候補の千葉敬愛高校と関東出場を決める準々決勝で対戦するやもしれず、と選手も緊張したが、実際には準々決勝は昨年の新人戦で敗れている市立千葉高校とあたることになった。一方女子は新人戦ではふるわなかった千葉敬愛が昨年の関東中学チャンピオンなどを強力に補強し今大会に挑戦してきたが、そことの準々決勝というカードになった。どこの学校もあたりたくない千葉敬愛によりによって、と少々気落ちしてはいたが、それが逆に選手に奮起を促す結果になったようだ。

男子は加藤のシングルスを軸に昨年末以来この大会に向けて作り上げた小林、及川組という秘密兵器に、誰にもまだ知られいていないルーキー小野塚とｷｬﾌﾟﾃﾝ吉川のこれまた秘密ダブルスを用意して臨んだ。初戦からいつものように力が抜けない及川にヒヤッとする場面があったものの、徐々に調子を上げ、事実上のデビュー戦であった小野塚を含めてチームの盛り上がりは最高に達し準々決勝を迎えた。第１ダブルスに吉川、小野塚が登場し元気よく戦い負けはしたものの雰囲気がますます高揚する。加藤が難なく決め、第２ダブルスにつなぐ。市立千葉はエース吉田がここにまわり、ダブルスを２本とるであろうと考えていた我々にとって受けて立つ気構えは充分。そのための及川のダブルスを作り上げたのだから。新人戦で吉田選手の前にぶざまな敗退をさらけた及川にとってこの試合は負けられない。試合が始まると及川、小林組のスピードを相手が全く止められない。吉田選手は手も足も出ない。練習は嘘をつかなかった。これで８年連続の関東大会出場を決め、続く準決勝、中央学院戦も粉砕し決勝千葉敬愛に臨んだ。結果は加藤がシングルスをとったもののダブルス２本をとられ１－２で敗退。しかし次のインハイ予選ではそうとうもつれそうな状況である。

女子は前述の千葉敬愛戦で大勝負になり、第１ダブルスからファイナルゲーム。途中いつものようにサービスジャッジにクレームを付け再三ゲームを止める監督に副審も出る騒ぎ、全く去年の男子の時と同じ様である。しかし西武台、真水、新川組は冷静にそして果敢に戦っていった。真水のあんな闘志を見たことなっかったという声と、あれで本当に中学の時ブラスバンド部だったの？という新川への驚きとともにファイナルゲームは圧勝。お見事！観客席の応援団、岡本コーチの元気なベンチワーク、お祭り騒ぎで本当に良かった。続くシングルスは平泉対野村（１年生関東１位）であったが、捻挫の後遺症が消えない平泉がよく頑張り３年生の貫禄を見せつけた。

準決勝の市原八幡戦はあっという間に島田、山田組のダブルス、平泉のシングルスが勝ち決勝へ。相手は新人戦同様の東葉高校であった。東葉へは六実中から４名が行っており層の厚さは県下においてはダントツであるが、特にシングルスの大塚、ダブルスの浅井、小野組は強敵で今回平泉の足の具合を計算に入れるとあっさり負けるかと思ったが、島田、山田が大健闘し、新人戦優勝ペアを大きく揺さぶった。やはりこちらも負けはしたもののインハイでの対決が楽しみである。

この大会に備えて冬中厳しいトレーニングを積み、春には中国遠征も行い、さらに強力な新入生も獲得し我がチームにとってはさらに思い出深い戦いとなった。その中でも３年生のがんばりは後輩たちにもよく理解してもらいたい。ダブルスへのコンバートで奮い立った小林、中学時代はブラスバンド部の新川、福間の２人、キャプテンでエースの平泉、そして「努力家」の吉川、このたった５人ではあるがそして中学時代無名の選手たちの「ひたむきさ」が勝利をよんだ。特に吉川選手は決して器用でないが自分には努力しかないんだといいきかせながら取り組む姿勢を、西武台の数々の優秀な選手たちとオーバーラップして高く評価したい。自分は誰のどの部分の優秀さを尊敬し、学ばなければならないのかここにもう一度考えさせられるそんな大会だった。

信州合宿　2000　12～15期生　登山　山頂

全日本ジュニア　佐藤・小池　15期生 2003　大阪

＊5.　15期生～17期生

幾分、知名度が上がり、特に埼玉県からの選手が増え、部員数も中高男女合わせると 40 名を越えた。誰でも入部できることから濃度（質）の低下も招いた。

千葉インハイから野田インハイに決まり、気運が高まる。しかし、残念ながら千葉県バドミントン協会との合意は得られず、西武台単独の強化方針を始める。野田ジュニアの結成、等。

practice 主な練習

多くの部員の中から、中心選手がメインとなって練習が行われた。茨城県の阿見中を指導している田村さんとの交流が増え、１点返しや、１：２まわし等の練習が増えた。部員数が多いのでダブルスの練習が増え、その指導法も確立してきた。反面、シングルスを好んでやる選手が減り、特に男子チーム選で最後の１本（シングルス）がとれず苦い思いを経験したケースが何回かあった。又、中国遠征から学んだラケットワークを実践したり、ステップワークを模倣するなど、大きな影響を残したころである。

tournament 主な大会

女子選手の中には全国中学生大会を経験したものが現れ、高校１年生の頃から大会に出場する選手が多くなった。その中で、女子 15 期生の佐藤真由・小池温子組は２年生の関東選抜で準優勝するなどの成績を上げ、インターハイでベスト 16、全日本ジュニアでベスト８、最後の高知国体（高知県南国市）では、千葉県バドミントン史上に残る第３位を獲得し、成年女子の優勝と合わせて、国体皇后杯優勝の栄誉に輝いた。

また、男子 16 期生の岡田秀樹選手は、中学高校と県チャンピオンを守り抜き、全国中学、インターハイ、全日本ジュニアなどで活躍した。

＊6.　18期生～19期生

2005 年に野田インハイが行われた。この地元インハイには６年ほど前より、独自の強化策をたててきた。加えて、特に 18 期・19 期には外部から優秀な選手が入り、特に女子はほとんど野田ジュニアー西武台中学校からの選手がそろった。

「週間バドミントン」を作成し、配布、月に１回の「月刊バドミントン」を保護者への連絡用として使用した。

practice 主な練習

個別指導が一般的にはなったが、選手のレベルがほぼ均一化し、特別な場を設ける必要にせまられた。そこで、女子は早朝６時から、そして、男女トップ選手は、夜終了後の特別個別の練習を組んだ。朝は、パートノックを徹底し、ストロークの安定化を図り、夜は、コート全面を広く使い、実践練習を行った。

この時期に確立したのが、ダブルスの戦術訓練である。ことに、戦術思想的なキーワードを用いて、繰り返し訓練し、安定したゲーム展開ができるようになった。

また、ダブルスの得意な選手の特化によって、以前では体力的にレギュラーに入れないレベルの選手が、県大会や全国大会で活躍できたのも単複分業体制の成果だと思う

反面、多人数、ダブルス重視によってシングルのスペシャリストが減っていったのも現実問題である。

パソコンによるゲーム分析、画像の処理を覚えた。

この大切な期間、選手の体作りとケガ予防のために上原トレーナーにお世話になり、姿勢や身体の使い方を学んだ。

tournament 主な大会

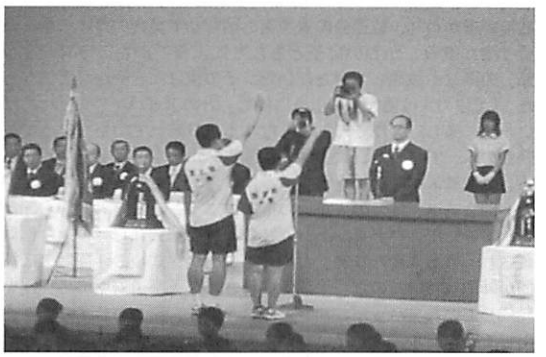
男子はそれまでの数年間、苦渋を飲んできたところを、17 期（インハイ前年）は県大会優勝、インターハイベスト 16 まで昇り、気運を高めた。一方、女子は現在８年連続９回の県優勝、インハ

イ出場の記録を更新中であるが、特に 18 期の地元インハイで初戦、大分県昭和女子高校との対戦を大激戦で制してのベスト 16 入りは、見事である。

そして、そのきらめき総体での男女ダブルス石川・平戸組、皆川・松本組の３位入賞は、上記のダブルス強化の結晶ともいえ、同年初出場のオールジャパン（兵庫県宝塚市）でさらに活躍し、女子ペアは本戦まで進み、ベスト 16 に入った。

また、国体でも 2005 年、2006 年と国体ブロックを西武台単独チームで通過し（2005 初優勝）、大いに活躍している。

さらに、2006 年には全国小学生優勝チームの主力選手が入部し、西武台中の活躍にも拍車がかかり、将来にさらに大きな希望をもたらしている。



インターハイ　選手宣誓　18期生 2005

コラム３　支え、支えられて（Ｔ＆Ｂ２２号より）

ー今回は９期生の川鍋　真弓さんですー

「ナベちゃん」の愛称を持つ選手はこれまでに３名いた。その中でも女の子は今年の春に卒業した川鍋　真弓さんだけである。（残りの２人は、ご存じカワナベブラザースで、彼らとは親戚ではありません）

江戸川をはさんで向こう側の松伏町松伏中学校から秋山先生の推薦で入学してきたのがついこの間のことのようだ。先生のお話を受け、中学校に挨拶に行った日、ちょうど午後の体育の授業を終えた川鍋さんがグランドから戻るところでばったりあった。つまりそのときが初めての顔合わせになるのだが、彼女の体操着の胸の名前が「川鍋」となっていたので、「ああ、この子か･･･」と元気に挨拶をする彼女に「君が、川鍋さんか」と念を押した。お世辞にも「スラッ」とした体型ではないがその笑顔にあふれる活力を感じた。

「やあ、あの子は気が強いよ。あの子だけだよ男子と本気にケンカができるのは」と秋山先生。プレーの方は「打ちっ放し」と言う感じでゴルフの練習ではないので入部早々から注意を与え続けた。しかし、彼女の独特の「内股」は日に日に強く、太くなるような感じがして皆内心心配していた。「このままじゃ足が１本になっちまうんじゃねえか」などと冗談を言うコーチもいた。そんな気が強くて、前進あるのみ型の彼女は時として多の選手とトラブルを起こした。これは悪いことではなくてチームの結束を図るためにはいいことなのでもあろうが、彼女の心は真っ平らで、他人の心がが入る余地が無くなるときがある。そして、部の中で孤立し、寂しい後ろ姿を何度か見たこともある。そんなとき必ず私に怒られるのが同じ中学出身の星野であった。彼女とは小さい頃からの幼なじみで、川鍋はいつも「タカちゃん、タカちゃん」と仲がよい。「いいか、星野、おまえがいるのは、川鍋のおかげだぞ。川鍋もきっとおまえに負けまいと、そしておまえのためにと思いながらがんばっていると思うぞ」といい加減な屁理屈で、今思うと星野にも悪いと思うが、その当時はどうしても川鍋とうまくやってもらいたかった。新人戦の時ちょっとしたミスから私は川鍋とすれ違いになった。そのときも心配で、一つ上の倉持（８期生）に頼んだこともあった。つまり、今にして思えば、その時勝ち始めた女子チームの「縁の下の力持ち」的存在の彼女にあたたかい言葉をかけることができなかったことからくるのだった。その後星野は関東大会で勝ち進み、全国大会へ進む。彼女はスポットライトを浴び始める。対照的に川鍋の姿が小さくなるようで、いっそう彼女の努力は深く、深く支えるだけのものになっていく気がした。そんな冬のある日、彼女は姉を失った。寒い、寒い日にその弔いがしめやかに行われた。その通夜に行く道すがら私は星野と同じく松伏中学の同級生で男子のキャプテンの遠藤と３人で歩きながら、同じチームメイトそれ以上のつながりだと思え、と、しかしそれは自分にもどうしようもないやるせなさを彼らに「頼む」と言わんばかりの情けない説得だったようだ。おかげで松伏軍団（自転車通学の元気な子たちです）の選手たちと、保護者会の皆さんの力強いバックアップで彼女は次第に元気になっていった。だけどそれよりも何よりも彼女を心から愛しているお母さん、お父さんの支えがあったのだ。彼女の母さんは選手なら皆知っている方で、それはいつも自転車で迎えに来ることだけではなく、その自転車のカゴに「ムク」という犬を積んでいるからである。いつも元気なニコッと笑う元気なお母さんには埼玉栄の加藤先生も驚いたことが思い出される。

そんな彼女を団長とする松伏軍団は夏の暑い日もそして冬の寒い日も自転車で江戸川を渡り、学校に通う。帰りは必ず同じコンビニによる。そしてそこのおばさんに「おかえり」と声をかけられる。いろいろなことを大きな声で話しながら帰る。たまには黙ったまま帰る。そしてたまにはケンカをしながら帰る。そんな日が繰り返されながら大会を待ちわび、３年最後の大会に臨む。昨年は１０周年記念でそれでなくても盛り上がる年に、川鍋、星野率いる松伏女子軍団も、遠藤率いる男子軍団も千葉県で見事に優勝した。優勝した瞬間、川鍋の顔もますます大きくふくらんだ。つらいことがあった。苦しいこともあった。そしてそれらが彼女を強く大きくしてくれたのだろう。全国大会が終わると、３年生はそれぞれ進路を考えはじめる。昨今大学受験が当たり前のようなバドミントン部の中で川鍋を含む３名が就職することを選んだ。景気もあまり良くない時代に思うような事業所を選ぶことは難しい世間だが、３人とも縁があって、納得がいく就職先が決まった。川鍋はなんと、学校のすぐ裏側にある「トステム」株式会社に内定した。それはそれは良かったというだけでゆっくり話す時間もなかなかない。それもそのはず新チームは特に男子が火の車、進路が決まった３年生には今度はコーチとして力を貸してもらった。それだけではなく川鍋は我がチームを支えるジュニアチーム「岩名ジュニア」（小林監督）の手伝いと、「川間ジュニア」の手伝いと、そして必要となる車の免許の取得に大忙し。特に車の免許は、最後まで手こずって教習所の主（ヌシ）になるところだった。そんなこんなで卒業式まで、そしてそれからも忙しい彼女だ。

春になって、唯一午後の半日がとれたので、私は家内と相談して川鍋の入社祝と、慣れない職場で苦労している彼女の「励ます会」をやろうと思って、関宿の島（河原にある島でとても気持ちがいいところである）に秀穂とともに４人でイスとテーブルをもって春の野の花の中で食事をした。「どうだ川鍋、職場は慣れたか？」「はい、慣れました」必ず答は繰り返すこの良い癖は変わらない。話していくうちに彼女はスクッと立って職場の様子をジェスチャーを交えてスピーチしはじめた。両手を大きく動かしながら「ここに〇〇という機械があって、私はここから□□をとってこの機械にに入れるんです。そう、その時方向を間違えちゃうですよ！そして、あの・・・」と彼女は話し続ける、目に涙があふれ出す。まだいくつか残っている頭の上の桜の花を眺めるように涙をごまかしていた。うれしさ半分、「大変だなあ」という苦労に頭が下がる思いが半分、複雑であった。

「今日な7、川鍋が橋渡っておったよ」木下先生が朝私に言ってくれた。「相変わらず自転車でなあ」と。今日もがんばる川鍋に、私もガンバレと自分に言い聞かせて一日をはじめている。ありがとう。